

「——今日も悪い子になっちゃうけど——」

次に、スカートの内側にたくしこまれていたブラウスの裾を外に出す。

「——ゆるしてね」

そして、ブラウスのボタンに指をかけた。セーラーカラーの襟合わせの部分から下に向かって順々に、ボタンをボタンホールからはずしていく。ボタンがすべてはずされると、左右のつなぎ目を失ったブラウスは、布の自重のままに沙夢の身体のラインに沿ってだらんと垂れた。

「あ、リボン、形が崩れちゃうといやだから、取るね」

つづけて、沙夢は腹部に手を伸ばした。スカートの後ろにつけられている大きなデコレーションリボンからは幅広のベルトが伸びていて、スカートのウエスト部にアジヤストボタンで留められている。そのボタンをはずすと、引っかけりを失ったリボンが、スルツと衣擦れの音をたててスカートの表面を滑り、ベッドの上に落ちた。

沙夢が上体をねじって背後のリボンを拾いあげ、いったんベッドから立ちあがってトコトコとデスクに歩み寄る。

(沙夢、ブラジャーを着けてなかったのか)

智久の目が、妹に注がれた。ブラウスのボタンはすべてはずされているため、前合

わせがゆらゆらと左右に揺れ、白い布地の隙間から、胸や腹の素肌が垣間見えているのだ。

沙夢は、リボンをデスクの上にそっと置くと、ベッドの上に座ったままの兄の正面に立った。

「どうして今日は、ブラジャーを着けてないんだ？」

智久が、妹を見あげながら尋ねる。

「うん。……だって、一度、お兄ちゃんが一所懸命作ってくれた服を、身体に直接着たかったから」

「なるほどな」

「あのね、着けてないのは、ブラだけじゃないんだ」

「ん？」

「あの、パンツも……穿^はいてないの」

（え？）

妹の告白に、息を呑む智久。

「あ、あの、さつき沙夢、『今日も悪い子になっちゃう』って言ったよね？」
「あ、ああ」

「だから、沙夢は——」

沙夢の視線が、フツと床に落ち、ひと呼吸ふた呼吸、息を整えたあと、

「——こんなことも、しちゃうの。見て」

と言いざま、手を伸ばして、スカートとパニエの裾を重ねてつかみ、そろそろと引きあげていく。

(さ、沙夢！)

智久は、驚きの声さえあげられず、ただ妹の行為に目を奪われてしまう。元々が、ごく短い丈のスカートとパニエだ。すぐさま腿のほとんどが、さらには付け根までが、ついには、股間から下腹部までもあらわになってしまった。

——こくつ——

智久が、空唾を呑みこむ。

目の前には、着衣のまま下半身を剥き出しにしている十五歳の妹。

ニーソックスにくるまれた脚。

その上に、ぼちゃぼちゃとした太腿。

滑らかな素肌に覆われた下腹部。

腰のラインは、すでに成熟の兆しを標して左右に張りだしているものの、恥丘には



まだほんの淡い翳りがけぶっているのみだ。

智久は、妹の半裸姿に目をやる。

そして、逸らす。

が、再び視線を向けてしまう。

半裸どころか、全裸姿さえすでに何度か目にしてはいる。それでも、このいたいけな肉体を目にするたびに後ろめたさを感じてしまい、そのくせ、どうしても引き寄せられてしまうのだ。

「お兄……ちゃん」

沙夢は自らの行為に、声を、肩を、脚を、そしてツインテールの先端をフルフルと震わせながら、

「お兄ちゃんが乃南ちゃんのこと好きってことはわかってるけど、沙夢はやキモチなんか妬いたりしないけど、でも、でも、沙夢が、こんなこともできちゃうくらいお兄ちゃんのこと好きだってことは、わかってほしいの。お兄ちゃんには、いやな思いをさせちゃうかもしれないけど……」

と、か細くつぶやき、スカートとパニエの裾を握りこんでいる手に、キュツと力をこめた。